# いっしょにつくるってなんだろう

障がいのある
子も、ない子も、
大人も、みんなで
つくったワーク
ショップ

特定非営利活動法人チア・アート

# 地域に開かれた
# 特別支援学校のアートワークショップ

この本は、2023年に茨城県立下妻特別支援学校で実施されたアートワークショップ「みんなでつくろう！千人おどり」を記録したものです。下妻特別支援学校と地域の小・中・高等学校に通う子どもたちによる混合チームで共同制作を行うこのワークショップは、教員や保護者によるサポートに加え、チア・アートが企画を担当し、茨城県内外からボランティアがファシリテーターとして参画するという、地域に開かれた取り組みでした。障害のある子も、ない子も、子どもも、大人も、みんなで悩みながらも、思いきり取り組んだこの活動。活動に関わった人たちの言葉を振り返りながら、「いっしょにつくる」とは一体どういうことなのかを考えます。


3-18　「いっしょにつくる」活動の記録

19-21　ワークショップ概要

22　ペイントアイテム

23　児童生徒会長インタビュー

24-25　対談　「いっしょにつくる」を考える

26　おわりに　気づきの余白のあるアート

27　事業概要・クレジット

分断せず、同じ地域の仲間としてのゆるやかな関係が生まれる企画に、「アート」が「教育」に持ち込まれる意味を感じました。方向性をもった活動とは異なり、360°の自由さに、とまどいもありつつ、交流の糸口として機能していたと思いました。
（ボランティア／NPOスタッフ）

娘と街を歩いているとジロジロ見られることも多く、これまで地域交流への参加にも少しためらいがありました。今の中学生がどのように自分の子どもを見るのか、偏見などが不安でした。でも活動が始まると子どもたちが、娘の下の名前を呼びながら、手を触って、一緒に活動してくれて。とても感動しました。
（下妻特別支援学校 保護者）

短い時間でしたが、とても濃い体験ができて楽しかったです。はじめは緊張していた支援学校のみんなも、だんだん明るい表情になって、嬉しかったです。色を混ぜたり、道具を使ったり、歌をうたったり、たくさんコミュニケーションがとれました。また機会があったら、ぜひ参加したいです。
（下妻第二高等学校）

共同で制作することで、直接的なやりとりが少なかったとしても、その場に一体感が生まれ、互いに影響を与え合っていたと感じました。始まる前に感じていた不安は杞憂であったと思うほど、子どもたちの間には自然な交流が生まれ、個性豊かな作品ができあがっていて、非常に良い空間になっていました。
（ボランティア／芸術系学生）

カラフルな絵の具や道具を目の前にして、お互いに素の高校生になっていました。生徒同士で普通にしゃべっている場面もあれば、重度の障害のある生徒がいるチームでは、交流校の生徒がその子の手を取って「この色が好きなんだよね」と話しかけている場面があり、子どもたち同士の関係性がみられたように思います。
（下妻特別支援学校 教員）

Tiger

僕は体の不自由な人と交流するということがこれまでになかったので、行く前は不安なところがたくさんあったのですが、先生やガイド（ファシリテーター）の方などのおかげでうまくしゃべることができ、とても楽しかったです。
（下妻中学校 2年生）

男の子が、「この子はどういう病気なんですか？」と聞いてくれました。今までそうやって聞いてくれる子はいなかったので、驚きつつもすごく嬉しくて、その子にも分かる言葉で息子の病気や障害についてお話ししました。障害のある人も「当たり前」の存在として見てもらえる優しい社会になったら嬉しいです。
（下妻特別支援学校 保護者）

最初はボランティアも、教員も、子どもたちも緊張していましたが、段々と、みんなで子どもに戻って、やりたいように、好きなように描いていました。皆さん、手探りだったと思いますが、自分の思いを伝えてみたり、その子に合った活動について考えながらサポートしてみたり、色々なチャレンジが出来る時間でした。
（下妻特別支援学校 教員）

すごく楽しかったです。また行きたいです。今度は、遊びに来てください。すごく特別なことを体けんしました。次は、外で遊びたいです。教室でもいっしょに勉強したいです。
（上妻小学校 3年生）

誰でも簡単に使える道具が用意され、思うままに取り組める点が良かったです。こうした企画がもっと広がっていくといいと思いました。他の人と、見た目や内側の見えないものに違いがあることが、当たり前だと思えるような、インクルーシブな世界に変わっていくために、何か出来ることはないかと考えさせられました。
（ボランティア／IT・経営学学生）

校訓
明るく
なかよく
すすんで

# 共に実践し、考え、議論するきっかけに

下妻特別支援学校は、知的障害のある子どもたちも多く在籍する肢体不自由児が学ぶ学校で、小・中・高等部の3つの学部で構成されています。学校では、2023年に創立50周年を迎える記念事業の一環として、アート活動を行うことになり、チア・アートが企画を担うことになりました。

そこで、チア・アートは、下妻特別支援学校と地域の小・中・高等学校に通う子どもたちが1つの作品を一緒に作ることで、楽しみながら互いの理解を深め、多様性や共に生きることについて考える機会となる活動、子どもだけでなく様々な年齢や立場の人が、共に実践し、考え、議論するきっかけとなる活動を目指すことに。授業の見学、子どもたちへのヒアリングや試作会を実施しながら、ワークショップの内容を先生方と考えていくなかで、本活動は、地域の小・中・高等学校との学校間交流として位置付けられ、児童生徒、教員、保護者、ボランティアなど、総勢200名を超える多様な立場の人たちで取り組む活動になりました。関わる全員にとって、初めての取り組みであったことから、検討事項も多く、校長先生、教頭先生、教務主任や学部主事の先生、実行委員長、チア・アートは、悩みながら、打ち合わせや準備を進めていったのです。

先生方による細やかな調整、保護者の方によるアイテム作り、ボランティアの方に参加いただいた事前説明会など、準備を経て迎えた2023年6月、アートワークショップ「みんなでつくろう！千人おどり」は、3日間にわたり開催されました。そして、子どもも大人も試行錯誤しながら、思いきり表現し、個性豊かでいきいきとした作品が完成しました。

次頁からは、ワークショップ概要、児童生徒会長へのインタビュー、実行委員長との対談を通して、この活動の持つ意味を振り返っていきたいと思います。

茨城県下妻特別支援学校創立50周年記念特別事業

# アートワークショップ「みんなでつくろう！千人おどり」

このワークショップは、下妻特別支援学校と地域の小・中・高等学校（交流校）に通う子どもたちによる混合チームで、1つの作品を作る活動です。下妻の夏祭りで親しまれる「千人おどり」をモチーフに、チーム内でアイデアを出し合い、大きな布に踊っている人を制作。肢体不自由、知的障害のある子どもたちと、どうやったら一緒に楽しく描くことができるのか、チームで考え、様々な絵の具やペイントアイテムを使って、工夫しながら進めました。活動においては、教員や保護者によるサポートに加え、茨城県内外から医療、福祉、教育、芸術など多分野で活動する人たちが、ボランティアとして参画し、チームの進行役であるファシリテーターを担いました。

## ワークショップのメンバー

**参加児童生徒**

- 下妻特別支援学校 小学部 ＋ 上妻小学校３年生※
- 下妻特別支援学校 中学部 ＋ 下妻中学校２年生※
- 下妻特別支援学校 高等部 ＋ 下妻第二高等学校JRC部※

※交流校

↑ ファシリテーター ボランティア

↑ サポーター 教員・保護者

**主催**　茨城県立下妻特別支援学校 創立50周年記念特別事業実行委員会

**企画**　特定非営利活動法人 チア・アート

## ワークショップの流れ

### 1 導入（約20分）

ファシリテーターがワークショップの流れを説明。自己紹介でお互いの緊張をほぐします。

### 2 作戦会議＋制作（約40分）

どんな踊っている人を作るか、どんな色やペイントアイテムを使うか、作戦を立てて制作開始。

### 3 休み時間（約20分）

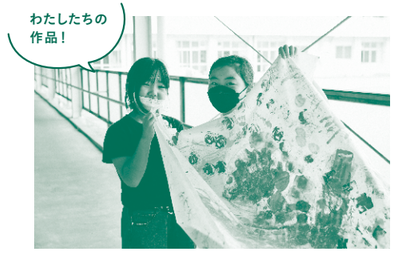
特別支援学校には医療的ケアを必要とする子も。無理せず活動を楽しめるように十分な休憩時間を取ります。

### 4 仕上げの制作（約30分）

細かな模様をスタンプしたり、表情を描き加えたり、完成に向けて作品を仕上げていきます。

### 5 まとめ（約20分）

チームごとに、個性豊かな作品が完成。活動を振り返り、他のチームと作品を見せ合います。



## 工夫が詰まったペイントアイテム

ワークショップでは、メラミンスポンジ、段ボールを丸めたスタンプ、スポイト、ローラー、トイレットペーパーの芯など、試作を重ねたうえで、様々なペイントアイテムを用意。先生の発案で、使いたいアイテムを子どもたちが選べるバイキング形式になりました。着色には、数種類の水性絵の具を用意し、学校にあったトレーが大きなパレットに。そして、筆のかわりに布を紐で束ね、みんなでその紐を持って描く方法（→ p.5）、長いローラーで描く方法（→ p.7）、電動式のおもちゃをコントローラーで操作して着色する方法など、先生方が子どもたちに合わせて製作したアイテムも登場。交流校の児童生徒やボランティアにとっても、どうやったら一緒に楽しく描けるのかを考える機会になりました。



## インタビュー

### 富岡禅さん

下妻特別支援学校高等部3年　児童生徒会長

今回のワークショップに、企画段階から協力してくれた富岡禅さんに、ワークショップに至るまでの思いや当日の感想を伺いました。

聞き手：松﨑仰生（チア・アート）

**――ワークショップの実施に向けて、児童生徒会長である富岡さんには、ヒアリングや試作会などで、たくさん協力していただきました。このワークショップに対する不安や期待などありましたか？**

初めて聞いた時は、「どんな活動なんだろう？」と思いました。でも、不安よりも下妻特別支援学校のみんなが楽しんでくれる活動になったらいいなという思いの方が大きかったです。例えば、ペイントで使うアイテム。自分にとっては問題なく使えるものでも、他のみんなも使えるかなと考えながら、試作会に参加していました。本番では、アイテムも改良されて、使いやすくなっていたと思います。

**――実際ワークショップに参加してみて、どうでしたか？**

一つの作品をみんなで作り上げたことが、楽しかったです。体育館にずらーっと並べられた作品も、すごくきれいでした。みんな色づかいも違うし、個性がありました。休憩時間に他のチームの作品を見ることができたのも良かったです。これまでの学校間交流では、僕たちが交流校の生徒にボッチャなどのスポーツを教える活動が多くて、活動中は交流できても、休憩中は何だか気まずくて、それぞれ分かれて過ごすことも多かったのですが、今回はそれがあまりなくて。下妻特別支援学校には、自分含め、人見知りしてしまう生徒も多いのですが、緊張せずに取り組めたのはボランティアの方々のおかげもあるなと思います。

**――今回のワークショップは、障害の有無や年齢を超えて、様々な人たちで作り上げた活動だったと感じています。これから富岡さんは学校を卒業し、社会人として生活していくと思いますが、こうなったいいなと思う社会について教えてください。**

やっぱり、障害を理解してくれる人が増えたら嬉しいです。この学校にいる時は感じませんが、世の中にはまだ知らない人がたくさんいると思います。実際私も、買い物中に電動車椅子で移動していると、「なんだろう？」という目で見られます。でも、慣れてきたら「普通だな」って感じられると思うんです。「こういう人がいて、当たり前なんだ」って思ってもらい、困っている時には声をかけあえるような社会になってほしいです。

**――交流校の生徒やボランティアの方々からは、皆さんがどのようなサポートを必要としているのか、傷つけてしまわないか、緊張しながら活動に臨んだという声もありました。**

今回のワークショップでは、交流校の生徒に加えて、いろんな職業のボランティアの方々と関わることができたし、自分たちのことも知ってもらえました。今回、初めて障害者と触れ合ったという人や、こんなふうに楽しく過ごしている姿を初めて見たという人もいたと思います。今回の活動のように、子どもの頃から一緒に時間を過ごすことで、どうやってコミュニケーションを取れば良いか、だんだん分かり、大人になってからの関わり方に不安を感じることも少なくなるのかなと思います。

## 対談

# 「いっしょにつくる」を考える

本企画の立案から準備まで、学校や保護者の皆さんとの架け橋になってくださった五十嵐純子さんと、チア・アートの岩田祐佳梨が対談し、活動を振り返りながら、「いっしょにつくる」ことについて考えていきます。

五十嵐純子さん
下妻特別支援学校PTA会長
創立50周年記念事業実行委員長

岩田祐佳梨
特定非営利活動法人チア・アート
理事長

ワークショップ当日の朝、 手順を確認するファシリテーター

### 子どもたちの力を引き出すアート

岩田　この企画は、子どもたちが同じ１枚の布に一緒に描くというワークショップでした。子どもたちにとっても、ボランティアの方にとっても、初めての体験だったと思います。活動のなかで、交流校の子が下妻特別支援学校の子に対して、「この色はどう？」などと声をかけている場面もあれば、お互い夢中になって、一緒に描いている場面もあって。大人が無理に交流を促さなくとも、１つの作品をみんなで作っている姿が、すごく自然な光景でした。これが子どもたちの力を引き出すアートなのかなと感じました。

五十嵐　保護者からは、「大人の心配をよそに、子どもたちがとても楽しそうだったのが一番良かったね」といった声もありました。せっかく大人のサポートがある環境で取り組む活動なのだから、子どもたちには、いろんなチャレンジをさせてあげたいと思っていました。確かに、障害のある子どもたち一人ひとりが安全に活動するうえで最低限の準備は必要ですが、そこも交流校の子どもたち自身に感じ取ってもらいたいという思いがあります。障害について大人がオブラートに包みすぎてしまうと、何かが抜け落ちてしまうんじゃないかなと。障害について、どのように知るかが重要なのかもしれません。大人に言われて知るのではなく、今の自分自身の力で感じ取る。子どもたちにはそういった力を養ってもらいたいんです。

### 関わる一人ひとりが、考える機会になったプロセス

岩田　実はこの企画は、当初は子ども同士でお互いの体のシルエットをとり合い、お互いを知る質問をし合いながら描くといった内容でした。ですが、保護者の方から、身体接触に対する懸念や、障害に関わる質問があると下妻特別支援学校の子どもたちが安心して楽しめないのではないかといった問題提起がありました。そこで、先生や保護者の方々と、もう一度企画を見直し、一緒に描くことに重点を置いた内容に変更しました。

五十嵐　ワークショップに対する批判的な意見も取り逃さず、きちんと受け止めながら進めていかなければという思いでした。また、コロナ禍による制約もありましたが、もっと早い段階から、教員、保護者、チア・アートの皆さんなど、全員で企画について話す機会が必要だったなと思いました。

岩田　おっしゃる通りです。皆さんとの議論を通して、その子の出来ることや苦手なことを探りながらどうやったら一緒に描けるか、活動に関わる一人ひとりが考える余白のある企画になりました。ですので、企画の見直しは、非常に重要なプロセスだったと感じていますが、もっと丁寧に企画について話し合う場を設けられるとより良かったと思います。

### 地域とつながるということ

岩田　このワークショップでは、ボランティアとして、医療、福祉、教育、芸術など多様なバックグラウンドの方が参加してくれました。特別支援学校に、先生でも親でもない、大人たちがやって来たというのも、重要な点だったと思います。今回の企画は、ただ手伝ってもらうのではなく、そういった方々の学びの場として成立していたように思います。

五十嵐　私もそう思います。特別支援教育の専門家である教員がいるので、「ボランティアによるファシリテーターが必要なのか」という意見もありました。先生は、毎日あれだけの愛情をかけて子どもたちと関わってくださっていますので、そういった意見も分かります。ですが、いざ学校の外へ出る時に、どうやって他の人に自分の子どもの苦手なことや、いいところを伝えようかと、私はいつも悩んでしまいます。なので、やっぱり外部の方々にも入っていただき、一緒に悩んでもらうことが大事だと思ったんです。教員不足のなか、これからの時代は、地域の方々と連携していく必要があると思います。でも、ただ「助けてくれ」というのは違うと思うんですよね。学校に携わってくださった方々に、「ここに来なければ、こういう経験できなかったね」と言っていただけるような活動が必要だなと。それって、子どもたちの魅力を伝えることだと思っています。先生の協力に加えて、チア・アートさんやボランティアの方々のような、外部の人々にも参画していただき、さらに学校の風通しがよくなっていくといいなと思っています。

## 気づきの余白のあるアート

この活動を通して、子どもたちの生命力あふれる作品が出来上がり、かけがえのない時間が生まれました。これは、下妻特別支援学校や交流校の先生方、保護者の方、ボランティアの方など、皆さんが知恵を出し合い、準備や議論をしてくださったおかげです。本当にありがとうございました。初めての試みばかりで、戸惑った方、不安に思った方も多かったことと思います。しかし、いざ始まってみると、チームのメンバーを気づかいながら、夢中で描く子どもたちの姿、子どもたちを見守り、彼らの力を引き出せるようにと支える大人たちの姿がありました。反省点はありながらも、充足した気持ちになったのは私たちだけではないはずです。関わる皆さんが「どうしたらいっしょにつくれるだろう？」と考えながら試行錯誤するプロセス、「気づきの余白」のある枠組みこそが、このアート活動の価値なのではないかと感じました。

特定非営利活動法人チア・アート
岩田祐佳梨、松﨑仰生

## 茨城県立下妻特別支援学校創立50周年記念特別事業
## アートワークショップ「みんなでつくろう！千人おどり」概要

### 小学部ワークショップ
開催日：2023年6月8日（木）
参加児童：下妻特別支援学校小学部（42名）、上妻小学校3年生（42名）
教員：下妻特別支援学校小学部教員、上妻小学校教員
ファシリテーター：ボランティア（20名）
サポーター：下妻特別支援学校保護者、保護者OBOG
制作作品数：42点

### 中学部ワークショップ
開催日：2023年6月7日（水）
参加生徒：下妻特別支援学校中学部（18名）、下妻中学校2年生（32名）
教員：下妻特別支援学校中学部教員、下妻中学校教員
ファシリテーター：ボランティア（11名）
サポーター：下妻特別支援学校保護者、保護者OBOG
制作作品数：17点

### 高等部ワークショップ
開催日：2023年6月12日（月）
参加生徒：下妻特別支援学校高等部（21名）、下妻第二高等学校JRC部（30名）
教員：下妻特別支援学校高等部教員、下妻第二高等学校JRC部教員
ファシリテーター：ボランティア（24名）
サポーター：下妻特別支援学校保護者、保護者OBOG
制作作品数：19点

### 展示
期間：2023年10月13日（金）～14日（土）
茨城県立下妻特別支援学校創立50周年記念式典、文化祭にて校内に作品展示

**主催**
茨城県立下妻特別支援学校
創立50周年記念事業実行委員会

**企画**
特定非営利活動法人チア・アート
（岩田祐佳梨、松﨑仰生）
高嶋結

**協力**
大谷理歩、樫村宙子、須藤優斗

**ボランティア**
秋田早穂、伊藤かをり、飯村心音、榎田潤、大谷理歩、樫村宙子、片山璃沙子、加藤晴香、金澤伸耶、唐澤依緒里、河東梨香、北原桜、久野遥加、小堀幸子、佐々木博子、重野康江、下田平理絵、澁谷祐介、高嶋結、髙橋千紘、滝史恵、田島祐子、千葉照子、出口藍子、飛内都佳、永瀬大紀、永瀬洋子、西村裕介、野村聖子、林剛人丸、疋田真彩、藤田剛史、牧奈歩、森谷久美、八木剛、山内明晟、山口礼乃、山本淳子、山本肇、山本美和、横張巧、吉田翼

**サポーター**
下妻特別支援学校保護者・保護者OBOG
（石松明日香、稲川美陽、川澄明日香、木間塚尚美、木村和子、柴原恵子、鈴木晃子、鈴木良実、生井みゆき、深田恵子、藤井直美、松﨑恭子、森川香織、谷口菜奈、山田よしこ）

---

いっしょにつくるってなんだろう
障害のある子も、ない子も、大人も、みんなでつくったワークショップ

発行日　2024年3月20日
編集　岩田祐佳梨、松﨑仰生、高嶋結
執筆　岩田祐佳梨、松﨑仰生
協力　茨城県立下妻特別支援学校、下妻市立上妻小学校、下妻市立下妻中学校、茨城県立下妻第二高等学校
写真　和田美潮
アートディレクション　高嶋結
デザイン　しばふ
助成　『令和5年度茨城県ボランティア・市民活動推進事業費助成事業』
多様性や共に生きることについて考えるインクルーシブアートイベントの普及啓発事業
発行　特定非営利活動法人チア・アート
〒305-8574 茨城県つくば市天王台1-1-1 筑波大学芸術系棟